

児童の寄せた 250 足、フィリピンへ届け 1 本の電話に学校は動いた

朝日新聞デジタル 2023/2/17 13:00 小西良昭

一足、また一足。2 月初め、まだ使える靴が京都府南部の小学校に集まった。児童や保護者が袋に入れて毎日持ち寄る。4 日間で 249 足。きっかけは、ある高校生からの電話だった。

1 月 30 日。児童数 615 人の木津川市立州見台(くのみだい)小学校の昇降口近くに、大きな段ボール箱が三つ置かれた。

〈←ここに入れてください いらなくなった靴・上履き・スニーカー・長靴・サッカーシューズ〉とサイズ〈16～26 センチ〉が書いてある。革靴、冬用ブーツ、穴あきスニーカー、ハイヒールは×印で対象外と示した。



フィリピンへ送る靴を集めた立命館宇治高校生。左から片岡典和さん、藤田圭祐さん、村田陽斗さん
＝2023年2月9日、京都府宇治市広野町、小西良昭撮影

壁に〈20 センチより小〉〈20～24 センチ〉〈24 センチより大〉の表示。その上に「フィリピン」へ靴をおくろう！〉の大きな文字。貼り紙は志賀徹校長(57)の手作りだ。

翌日。靴が入り始めた。サイズが合わなくなった靴。まだ使える靴。商品札付きの未使用靴もちらほら。3 足、4 足と抱えてやってくる保護者の姿もあった。

「たまってる」「家にもあるわ」と子どもたち。回収箱はすぐ満杯になり、志賀校長が校長室へ運び、20 足ずつ整理する。

回収最終日は 2 月 3 日。授業参観日に合わせた。

「良い取り組みですね」「まだ間に合いますか」「夕方、持ってきます」。善意が箱にあふれた。

学校に電話があったのは、昨年 6 月だった。

小学校に電話「実は私は卒業生で……」

「高校で貧困問題を勉強しました。実は私は(州見台小の)卒業生で、海外の子に靴を送りたい。協力していただけないでしょうか」との申し出だった。

直接の教え子ではなく、「手間のかかることは……」と断ることもできた。

でも、志賀校長は思い直す。渡りに船の提案だと。

履けなくなり捨てるかもしれない靴が、海外の同世代の役に立つ。「自分たちの行いが外国の誰かを幸せにするかもしれない」と子どもに伝わるのではないか。コロナ禍で、人とのつながりを感じにくい学校生活だとも感じていた。

チラシの用意などを高校生にアドバイスした。日程が決まり、高校生が回収箱を持参する前の1月27日、子どもたちにチラシを配り、趣旨を保護者にメールした。



京都府木津川市立洲見台小学校の靴回収箱はあふれそうになり、庫次校長室へ運んだ＝2023年2月2日、同校提供

「本校卒業生でもある高校生たちが、靴がないため感染症で命を落とす海外の子たちを支援する活動をしている。趣旨に賛同し、できる範囲で協力したい」とし、「靴の記名が気になったら、黒く塗っていただいても結構です」と書き添えた。2月1日朝には、全校放送で呼びかけた。

「集まらなかったら自分で上靴を買おう」と志賀校長は心づもりをしたが、取り越し苦労だった。

電話したのは、藤田圭祐さん(18)。立命館宇治高校(京都府宇治市)の3年生だ。

授業の課題テーマに貧困を選び、村田陽斗(はると)さん(18)、片岡典和さん(18)と一緒に靴を集めると決めた。3人はそれぞれサッカー、アメフト、フットサル部の部員。靴で役に立ちたいと考えた。

海外へどう送るか。

3人は国際協力団体に相談したが、初めに希望したケニアへ送れないとわかった。別のNPO法人「SB.Heart Station」(さいたま市)から、フィリピンへ送る道筋を昨年秋につけた。

友人の力を借りて、PR動画(<https://youtu.be/ZeL3e0Wz38s>)を作った。貧富の差が大きく、靴が買えずに病気にかかる危険のある子たちがいると伝える内容だ。字幕に振り仮名がなく、小学生には難しかったが、志賀校長が保護者に紹介してくれた。一部の教室でも流してくれた。

藤田さんは「小学生は成長が早いので余った靴が多いはずだと考えた」。

大人との交渉は初めてで、連絡遅れなどミスもした。「先生も子どもたちもすごく協力してくださった。母校の後輩たちが貧困に興味を持ってくれるなら、少しは恩返しできたかな」。大学進学後は留学をめざす。

靴の回収は2月3日に自転車2台で向かったが、とても運べず。同8日に親たちに車を2台頼んだ。後席を倒して荷室に満載した。

実は立命館宇治中学・高校でも昨年末に呼びかけた。集まった靴は約30足。「伝え方が足りなかった」と片岡さん。

16箱に合計約270足を詰めてNPOへ送った。フィリピンに届いたら、写真をもらって小学校へ報告する。NPOの南澤正久事務局長(63)は「一団体では多い数。物を大事にして世界の子に寄付する思いはありがたい。大切にしてほしい」と話す。4月以降にミンダナオ島へ送る方向だという。

志賀校長も便りを心待ちにする。「知らない国で自分たちの靴を履いてもらえたら、子どもたちはきっと喜ぶ。机上の勉強が太刀打ちできない充実感がある。手間も要ったけれど、捨てたもんちやうなあ」(小西良昭)